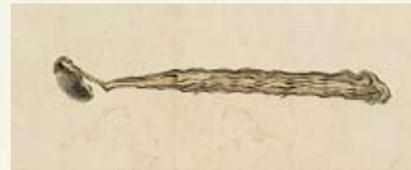


強壯の生薬として 珍重された獣 〈オットセイ〉

動物としての「オットセイ」については、本誌
2007年9月号に興味深い記事がありました。
この海獣はしかし、別なところでも面白いのです



これが「おっとせい」(臘腦臍)です。
実は陰莖



「おっとせい」あるいは「オットセイ」という動物。ご存じですかね。動物園や水族館で大きな糞を鼻に乗せている姿を連想される方もいらっしゃるでしょうし(ほんととはちがうのですけどね)、あるいはハレームを作る動物としてのほうが良く知られているかもしれません。また毛皮獣としても有名ですね。

おっとせいの獣名は「おっとつ」

ところで「おっとせい」ですが、どんな言葉に由来していると思いませんか。英語? ではありませんし、ロシア語でもなさそうです。そうなんです。これは日本語なんです。ものの本によりますと、日本では

寛永一五(一六三八)年刊の『俳諧毛吹草』に出てくるとありますから、江戸時代にはすでに知られていた動物ですね。有名な『本朝食鑑』に「臘腦臍 積名俗訓乙十世伊」と記されているので、「おっとせい」は本来「臘腦臍」と書いていたのです。読みは「おっとせい」のほかに「おっとさい」というものもありました。当然「臍」の読みですね。

明の李時珍があらわした『本草綱目』獣部第五十一巻には「臘腦」獣と採録されています。読みは「おっとつ」です。異名で「海狗腎」ともいいます。

これを小野蘭山著『本草綱目啓蒙』での解説によってみますと「臘腦ハ獣ノ名、外腎ヲ用ユルニ臍ヲ連ネトル、故ニ臘腦臍ト云」とあり「本邦(日本のこと)ニテ直ニヲツトセイヲ獣ノ名トスルハ誤リナリ」

アイヌ語から中国語へ

「おっとせい」は北太平洋やベーリング海に繁殖地を有していますが、日本近海には樺太島南端のロベン島(海豹島)に繁殖地をもつ「おっとせい」がオホーツク海沿いに南下して多くは北海道の噴火湾にはいり、一部が奥尻島沖へ回遊しますが、な

おっとせい猟の準備



噴火湾での狩猟



日本の役人に差出してほうびをもらう



捕獲して帰村

かには千葉県沖にいたるものがあるとのこと。で、「臘腦」ということですが、金田一京助氏によりますと、もともとアイヌ語のオンネツ(onnets)が日本語に入ってウネウ(umew)と訛り、それが長崎を経て中国にはいつて臘脳になったのだろうと推定されています。つまりオンネツが音訳されて臘脳になったというのです。金田一氏は中国語では「ウネウ

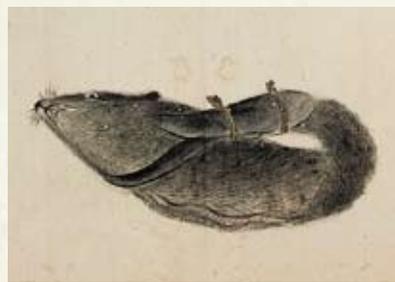
であつたはずだ」といいます(『金田一京助全集』六)。同僚の韓敏准教授にうかがうと、この文字は現代のことばではオットセイと発音されること。なんとなくオンネツやウネウを彷彿させませんか。

中国で臘腦臍が生薬となり、『本草綱目』に記載され、それが日本の本草家のバイブルのようなものであったから、日本でもさまざまに本に引用されるようになりましたし、商人たちの取引の対象ともなりました。

苛酷な猟の対象物

ところでロベン島の「おっとせい」ですが噴火湾に回遊すると書きましたが、一月から二月が最大数に達します。

一八世紀から一九世紀なかばにかけて、この「おっとせい」をめぐる



塩漬にしたおっとせい

オットセイ

Callorhinus ursinus 英名 Fur Seal
食肉目アシカ科

アシカに類似する海獣であるがアシカよりも小型で体長は雄2.5m、雌で1.3mほど。からだは紡錘形を呈し、四肢は短くヒレ状。陸上歩行ができる。前肢は遊泳と歩行に用い、後肢は海中では遊泳に用いる。体色は成獣の背中では黒茶またこげ茶。体毛は上毛と下毛に分かれ、下毛は短く密生する。

繁殖地は北太平洋、ベーリング海のプリビロフ諸島、コマンダー諸島、南樺太のロベン島など。海棲の毛皮獣としてラッコとともに珍重され、大量捕獲されるようになると激減を恐れ、1911年、日米加ソ連の四カ国で国際協定を締結した(「オットセイ保護条約」1988年失効)。南半球にはミナミオットセイ属が棲息する。(西脇昌治『鯨類・鯨脚類』(東大出版会、1965年)による。)

「おっとせい」を猟するのは唯一アイヌの人びとだけでしたから当然生産量は限られます。献上した残りを商人たちが競って求めたのですが、にせものがとても多かつたということです。

なお図版は佐々木ほか編『蝦夷島奇観』(一九八二年・雄峰社)から引用しました。

て噴火湾のアイヌの人びとは海上に猟に出ます。捕らえた「おっとせい」は徳川将軍への献上品となります。だから松前藩や松前奉行所はアイヌを競わせて一頭でも多く捕獲させます。内湾とはいえ、冬の海です。きわめて苛酷な、しかも危険の多い海獣猟です。コタンごとに猟域が厳しく決められていますから、一日、猟に出ている一頭の捕獲さえできなかったことが多かったといわれています。

佐々木利和

民博 先端人類科学研究部

アイヌの民族誌を通時的に勉強しています。

おっとせいが泳ぎながら寝ているところ。必ず白い鳥が側にいます。